

港湾振興便り



2017. 11

第126号

*:

目 次

*:

1 ポートエッセイ

—造船の都市から創造都市へ

ナント市とビルバオ市に学ぶ—

～日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 篠田 昭～

2 トピック

- 「ザ・シンポジウムみなとin留萌」を開催

(「ザ・シンポジウムみなと」実行委員会)

- 第8回「北海道みなとオアシス活性化協議会」を開催

(北海道みなとオアシス活性化協議会)

- 飛鳥Ⅱが石巻へ2度目の寄港 ～今年的大型客船はこれで見納め～

(石巻市 建設部河川港湾室)

- まちを守る大船渡港湾口防波堤見学会

(大船渡市 商工港湾部 企業立地港湾課)

- 「ばしふいっくびいなす」中津港に寄港

(中津港利用促進振興協議会〈中津市 商工農林水産部 企業誘致・港湾課〉)

3 お知らせ

◇第21回海岸シンポジウム「高潮災害に備えて」

◇酒田港ポートセミナーin東京

*:

1 ポートエッセイ

—造船の都市から創造都市へ

ナント市とビルバオ市に学ぶ—

～日本港湾振興団体連合会会長（新潟市長） 篠田 昭～

*:

（危機をバネに新しいまちづくり）

10月18日から1週間、世界の創造都市のトップランナーと言われるフランスのナント市とスペインのビルバオ市を訪問する機会を得た。二つの都市には共通項がある。20世紀半ば過ぎ（1960-70年代）まで造船業に代表される重厚長大の産業都市として栄えてきた両市は、新興国の追い上げにより主要産業が競争力を失い、一気に衰退の奈落に落ち込んでしまった。ビルバオでは失業率30%を超えていたところ、1983年に大洪水の追い討ちにも見舞われた。両市ともこれを逆にバネにして、造船などの工場地域を文化や芸術の力を活用して交流と創造の場に変え、公共交通と住宅建設を柱にした新たな都市計画や環境政策を導入し、まちを立て直すことに成功した。

（文化創造の力は日本でも注目）

日本でも創造都市づくりの重要性が指摘されているが、ここまでの経済危機を経験していないことや、もともと文化関係の予算が少ないこと、さらに交通警察を基礎自治体が持っていないこともあって、これほどの劇的な展開は難しいかもしれない。しかし、文化が人を呼び、地域の活性化に資する例は、新潟県の大地的芸術祭や瀬戸内国際芸術祭などで立証されている。

私が市長を務める新潟市も10年ほど前から創造都市を目指し、2009年には縁あってナント市と姉妹提携の調印をした。そのこともあって創造都市の歩みを強め、いまは創造都市ネットワーク日本（CCNJ）の代表幹事を担当している。その立場で各地の事例を学ぶうち多くのことに気づかされた。文化は地域の絆を強くし、地域での助け合い・支え合いの気持ちを育てることにもつながる。「これは超高齢社会を乗り切る大きな力になる」と指摘する福祉関係者、まちづくり関係者も多い。若者や子どもたちに地域の愛着を深める効用は、人口減少の時代により大きな意味を持つ。さらに災害に遭った時、地域力の強い土地柄の所は復旧・復興の力が強いことを実感している。

（目を見張るナントの公共交通）

新潟市の姉妹都市であるナント市からは、これまでも多くのことを学んできた。今回は「日仏都市・文化対話2017」が開かれたのを機に訪れた。ナントから世界に広がっている「ラ・フォル・ジュルネ」（熱狂の日音楽祭）は、東京国際フォーラムなどでも圧倒的な人気を得ている。何十人もの人を乗せて歩く巨大な機械仕掛けの象を操る技術集団ラ・マシーンはナントの観光資源だ。さらに公共交通政策でも世界をリードし、中心部には車を制限してトラム

（LRT）3路線、さらに専用レーンを持つBRT1路線とまちなかBRT路線には140台の連節バスが走り回っている。今回はブルターニュ大公城と大阪城が友好城郭提携をし、その署名式が行われた。そのナント大公城では赤穂浪士をテーマにした「47人の浪人展」が開催中で、フランス人の日本文化好きに改めて驚かされた。

（グッゲンハイムは氷山の一角）

ビルバオ市はスペインのバスク自治州にあり、旧造船所跡地にグッゲンハイム美術館を誘致したことでいきなり世界の注目を浴びた。「しかし、それは氷山の一角」とビルバオのまちづくり関係者は語る。まちの中心を流れるネルビオン川の浄化など幅広い都市計画が「重工業の都市」を「交流の都市」に変えたという。バスク自治州は食がおいしいことで知られている。特にサンセバスチャンは人口当たり最もミシュランの星が多い「美食のまち」として有名だ

が、最近ビルバオが食の分野でも存在感を増し、ミシュランの星も急増している。地元の食材を徹底的に大事にする「キロメートル・ゼロ」運動は、日本にとっても大いに参考になりそうだ。バスクは自治権の強い「歴史的自治州」の位置を既に獲得しており、独立を目指すカタルーニャ州の動きを冷めた目でみていた。

港まちは元来交流に支えられていた。クルーズなどの新しい動きと、地域の魅力を引き出す創造都市づくりをマッチさせていきたい。

:

2 トピック

:

● 「ザ・シンポジウムみなとin留萌」を開催

(「ザ・シンポジウムみなと」実行委員会)

平成29年11月7日(火)、留萌港の開港80周年を記念し、食と観光をテーマに、留萌港を中心とした新しい地域住民の交流や、地域観光の振興を通じたみなとまちづくりを図るため、留萌市で「ザ・シンポジウムみなとin留萌～開港80周年 留萌港の未来を考える～」を開催しました。

福士廣志氏による開港80周年を記念した「留萌築港と五十嵐徳太郎」の講演に続き、各種メディアで料理研究家としてご活躍されている森崎友紀氏による「地元の食材を活かした みなとまちづくり」をテーマとした基調講演では、留萌の地元食材(数の子、ルルロッソ、南留萌米など)によるアイデア料理や食材を活かした留萌の全国発信などのお話いただきました。

林北海道大学大学院農学研究院客員教授をコーディネーターに、高橋留萌市長や佐藤(株)エフエムもえる代表取締役社長、川西近畿大学准教授、高田井原水産(株)取締役営業副本部長、により繰り広げられたパネルディスカッションでは、みなとを核としたまちづくりをはじめ、深川・留萌自動車道の平成31年の開通を見据えて、食と観光での広域連携など多方面から、留萌港の将来像について地域の取組方や戦略について議論をいただきました。高橋市長からは「留萌に訪れ、非日常を感じてもらいながら感動してもらうことが大事」と“人情のみなとまち”留萌市の今後の在り方についてお話をいただきました。



基調講演の様子



パネルディスカッションの様子

●第8回「北海道みなとオアシス活性化協議会」を開催

(北海道みなとオアシス活性化協議会)

第8回「北海道みなとオアシス活性化協議会」を、11月1日(水)に開催しました。

本協議会は、「みなとオアシス」の相互の情報交換や意見交換の場の確保と、「みなとオアシス」の更なる地域の賑わいの創出に向けた取り組みを検討することを目的とし、北海道で登録されている10の「みなとオアシス」運営協議会員等の関係団体により構成されています。

本協議会は平成23年度に設置され、同年に第1回の活性化協議会を開催し、毎年開催しております。

協議会では、事務局から「みなとオアシス」の制度改正や全国のみなとオアシスの取組状況、各団体等の助成制度などの情報提供のほか、各運営協議会から「みなとオアシス」での活動状況について報告・意見交換を行いました。

また、平成30年度に「Sea級グルメ全国大会」が「みなとオアシスもんべつ」(北海道紋別市)で開催することが決定し、北海道一丸となって盛り上げるための意見交換を行いました。

本協議会を通じ、今後も北海道内のみなとオアシスを中心として、港を核としたまちづくりの促進、地域の更なる活性化が図られることが期待されます。



「北海道みなとオアシス活性化協議会」の様子



意見交換で発言される

「みなとオアシスもんべつ運営協議会」竹内代表

●飛鳥Ⅱが石巻へ2度目の寄港 ～今年的大型客船はこれで見納め～

(石巻市 建設部河川港湾室)

平成29年10月26日、石巻港雲雀野中央ふ頭にて、石巻港へ今年最後の寄港となった大型客船「飛鳥Ⅱ」を歓迎するためのおもてなしイベントを開催しました。

当日は、大漁旗を掲げてのお出迎えと、女川若獅子會による獅子振りが、入港セレモニーを華やかに彩りました。

台風の影響によりツアー行程が大幅に変更されましたが、石巻港へは予定どおり寄港することが叶い、下船した乗船客は、岸壁の特産品販売ブースやオプションツアー先で沢山のお土産を購入されていました。

出港時には、女川中学校吹奏楽部による演奏が行われ、最後はイベントの来場者と関係者が紙テープやペンライトで、デッキにお集まりいただいた乗船客と再会を約束してお見送りしま

した。

来年も石巻港には多くの大型客船が寄港予定であり、引き続き「石巻ならではの」おもてなしをしていきたいと思えます。



女川中学校吹奏楽部による演奏



飛鳥Ⅱ出港時のお見送り

●まちを守る大船渡港湾口防波堤見学会

(大船渡市 商工港湾部 企業立地港湾課)

11月7日(火)、大船渡港において「まちを守る大船渡港湾口防波堤見学会」(主催:大船渡港振興協会、共催:国土交通省東北地方整備局釜石港湾事務所・公益社団法人東北海事広報協会・大船渡市)が開催され、大船渡市立末崎小学校6年生23人が参加しました。

大船渡港湾口防波堤は、東日本大震災津波により甚大な被害を受けましたが、国により復旧工事が進められ、平成29年3月に完成しました。

見学会は、まちを守る湾口防波堤の役割や、港や船に関わる仕事への理解を深めることを目的として開催されたものです。

児童たちは、釜石港湾事務所の港湾業務艇「くろがね」に乗船し、普段目にするのできない海からのまちの景色に目を輝かせながら、新たに完成した湾口防波堤の大きさに感嘆の声を上げ、自分達の生活に欠かすことのできない港の役割や湾口防波堤の機能などを学びました。



港湾業務艇に乗船し、湾口防波堤開口部を見学



港湾の役割について説明を受ける児童たち

● 「ぱしふいっくびいなす」中津港に寄港

(中津港利用促進振興協議会〈中津市 商工農林水産部 企業誘致・港湾課〉)

10月6日(金)、中津港多目的国際ターミナルに「ぱしふいっくびいなす」が寄港しました。

11時の着岸後に船内で行なわれた歓迎式典では、奥塚正典中津市長より乗船客の皆様へ「今日はあいにくの天候ですが、中津での観光を楽しんでいただき、福澤諭吉のふるさと中津に、ぜひ多くの“福澤諭吉”を里帰りさせてください」とユーモアあふれる歓迎の挨拶を申し上げます。その後、草野修一中津市議会議長より松井克哉船長へ、中津の伝統工芸品である中津和傘をアレンジした「あんどん」が贈呈されました。

乗船客の皆様は、黒田官兵衛が築いた「中津城」や豊後高田「昭和の町」、日本遺産に認定された「耶馬溪」へお出かけになったり、道の駅「なかつ」でのお買い物や岸壁での「おおい体験コーナー」を楽しんだり、大分でのひと時を過ごされました。

21時、中津市職員互助会音楽部による華やかな演奏の中、「ぱしふいっくびいなす」は次の寄港地となる長崎港へ出港しました。



歓迎式典での記念撮影



移動式「足湯」でホカホカ



人形絵付け体験と耶馬溪茶の振る舞い



長崎港に向けて出向

